票にならない声

死刑と選挙

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

　参議院選挙が近づいてきました。国政選挙のたび、さまざまな争点がありますが、死刑の是非が取り上げられることはあまりありません。

★☆★

　日本の死刑制度に批判的な意見を持つ国会議員や候補者も少なくはないのですが、それが票に結びつくとは考えられていないようです。逆に、死刑反対の姿勢を示すことは、選挙運動にマイナスになりそうな懸念を持たれているかもしれません。

　それで、私たちも、この候補者は死刑反対の人だからぜひ投票を！　とはなかなか呼びかけづらいところがあります。

　かといって、死刑大賛成と広言する方もあまりいません。あえて問えば「重要な問題だから、慎重に考えたい」と答えられる方が多いのではないでしょうか。やはり、死刑が国家による「殺人」に他ならないことへの躊躇があるのでしょう。

★☆★

　東京拘置所では三〇〇〇人もの被収容者が生活しています。その人たちの多くはまだ裁判中ですから選挙権はあるのですが、住民票等の関係もあり実際に投票する人はほとんどいないようです。受刑者や死刑確定囚には選挙権はありません。彼らの声は政治に反映されようもない状態です。あたり前だ！　と思われますか？

★☆★

　約六〇年前まで、日本では女性の参政権はありませんでした。大正時代までさかのぼれば、男性でも一定の納税額を納めている人にしか選挙権はありませんでした。　また、日本の選挙権年齢は二〇歳から（参議院の場合、被選挙権は三〇歳から）ですから、少年法を改めての厳罰化も、子どもたちが自分たちには決められないルールのもとで進められているわけです。

★☆★

　たんに参政権を与えればよい、というのではありません。そういう「票にならない声」をくみとった政治が求められるのではないか、ということです。さまざまに票にならない声を発している人たちが現にこの国で共に生活しているのですから。

　それは、幸いにして票を持った一人一人が熟慮し、政治に反映させるよう努めるべきことではないでしょうか。

　私たちも熟慮しています。